

## なしのワタアブラムシの多発生と防除

### 1 試験のねらい

昭和56年頃から、なしにワタアブラムシの発生がみられるようになり、殺虫剤に強く、防除が困難なことから急速に県内各地に広まった。そこで、県内における分布状況、発生消長を知るとともに、防除試験を行って有効薬剤を検討した。

### 2 試験方法

#### (1) 分布調査

昭和59年5月31日～6月29日まで、県内各地のなし園40ほ場を巡回し、発生するアブラムシの種類と発生量を調査した。採集したアブラムシはプレパラートにして同定した。

#### (2) 発生消長

場内果樹園（豊水主体の混植園）及び予察ほ（幸水主体の混植）の2か所を対象に10日間隔で調査を行った。方法は園内を一巡して100新梢に寄生するアブラムシの種類を調べ、寄生新梢率とした。果樹園はよく防除を行っており、予察ほは、防除回数が少なく、特にアブラムシの増加する5月中下旬の殺虫剤散布を省略した。

#### (3) 防除試験

昭和57～59年の6月～7月上旬に、場内のなし園で行った。方法は各薬剤とも実用濃度で散布し、散布前、散布1日後、3日後、7日後の寄生数を調査し植防Ⅱ式による防除効率をみた。

### 3 試験結果

#### (1) 県内におけるアブラムシの分布

調査した40園のうち、アブラムシの発生がみられたのは35園であった。その内訳は表-1のとおり、ワタアブラムシの発生は多く、優占種である場合も多かった。以前はそれほど多くない種類であったが、最近の急増ぶりがうかがえる。

次いで多かったのがモモアカアブラムシ及びユキヤナギアブラムシであったが、ユキヤナギアブラムシは多発園もみられた。

その他の種類は表-1のとおりであるが、比較的防除の少ない園でみられている。昔からのなし害虫として有名なナンワタムシ、ナンミドリオオアブラムシなどはみられなかった。なし園におけるアブラムシ相の変化がみられる。

表-1 なし園にみられたアブラムシの種類  
(昭和59年5月31日～6月29日)

アブラムシの種類	発生園数	うち優占種であった園
ワタアブラムシ	31	27
モモアカアブラムシ	11	1
ユキヤナギアブラムシ	9	4
ナシアブラムシ	2	2
チューリップヒゲサガアブラムシ	2	1
<i>Ovatus</i> sp.	2	
ナシコフキアブラムシ	1	

(2) 発生消長

アブラムシ類の発生は5月中旬に始まったが、ワタアブラムシは下草のなずなから、モモアカアブラムシも下草のはこべが刈り込まれてからなしに移動したのが発生源であった。ユキヤナギアブラムシとチューリップヒゲナガアブラムシは有翅虫の飛来から発生が始まった。

ワタアブラムシの発生は、かなり殺虫剤の散布された果樹園でも多発し、7月上旬にはピークとなったが、他のアブラムシ類は少なかった。予察ほでのワタアブラムシの増殖は殺虫剤が少ないだけ早くなり、6月中旬にはピークとなった。他のアブラムシ類も多く、ユキヤナギアブラムシ、モモアカアブラムシなどが目立った。

7月下旬以降は新梢の葉も固くなり、ワタアブラムシが矮化し、黄色の個体がわずかに見られる程度となった。

(3) 防除試験

昭和57～59年に農試場内で行った防除試験の結果は表-2のとおり、ワタアブラムシに対して、多くの有機りん剤は効果が劣った。りん剤の中ではスプラサイド、ランベック、サリチオンの効果は比較的高く、実用的効果は期待できる。

カーバメイト剤はいずれも高い効果を示したが、昭和59年の試験ではマイクロデナポンの効果がやや不安定であった。

合成ピレスロイド剤のパーマチオンはきわめて高い効果を示した。

表-2 ワタアブラムシに対する防除効果

殺虫剤名	使用濃度	試験年度		
		57	58	59
Aキルバール液剤	1500倍	×	×	△
エストックス乳剤	1000	×		
DDVP乳剤	1000	×		
スプラサイド乳剤	1000	○		
ランベック乳剤	1000	○		
マラソン乳剤	1000		×	
ダイアジノン水和剤	1000		△	
サリチオン乳剤	1000		○	
エカチン乳剤	1000		×	
スミチオン乳剤	1000		×	
Bマイクロデナボン水和剤	1200	○		△
デナボン水和剤	800		◎	
アシルメイト乳剤	1000		◎	
Cパーマチオン水和剤	2000			◎

4 成果の要約

近年、県内各地のなし園でワタアブラムシが増加した。

発生は5月～7月までの新梢伸長期に多く、5月下旬～6月上旬までのアブラムシ増加期に防除をする必要がある。

有効薬剤はスプラサイド、ランベック、サリチオン、NAC剤、アシルメイト、パーマチオン等であるが、パーマチオンについては蚕毒が長期にわたり、きわめて高いので使用規制地域では使用しない。

(担当者 病虫部 合田健二)

注 防除効率から、95以上を◎、90～95を○、80～90を△、80以下を×とした。A：有機りん剤、B：カーバメイト剤、C：合成ピレスロイド剤。